
Bouquet

まっく

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Bouquet

【Nコード】

N4075C

【作者名】

まっく

【あらすじ】

「三谷、キレイだね」結婚式二次会のトラットリア。主役達から少し離れたカウンターテーブルに一人佇む。三年前に彼氏にフラれてビービー泣いてた姿がウソだった様に。うん、今日の彼女は完璧に綺麗だ。

” パパパパーン パパパパーン ”
メンデルスゾーンが高らかに流れ始めた。

最高潮の音律に乗せて、スポットライトを全身に受けた眩ゆいばかりの新郎新婦が足を踏み出す。

『…二次会の始まり方はベタなんだ』

披露宴のオープニングが斬新なR & Bだったから今度もさぞ凄かろうと期待していたのに、何だか肩透かしを食った気分で吹き出してしまった。確かにアイツは意外と正当派が好みだった。

「三谷、キレイだね」

結婚式二次会のトラットリア。主役達から少し離れたカウンターテーブルに一人佇む。

三年前に彼氏にフラれてビービー泣いてた姿がウソだった様に。うん、今日の彼女は完璧に綺麗だ。

「ジンをロックで。あ、良かったらライム落としてもらえますか？」

カンパイ前にお行儀が悪いとは思ったが、バーテンダーは特に咎めずにブルーエメラルドのボトルを手にして、かしこまりましたと短く応えてくれた。

「おめでと」

ヒンヤリとしたグラスを掲げて。

遠くから、ずっと遠くから二人の旅立ちを祝う。と、目敏くそれを認めて三谷が手を振ってきた。

なんて観察力してるんだろう。チャペルの時といい、多分もう気づいてるんだろう。先程の苦い一瞬が胸にまざまざとよみがえった。

『次は野村センパイの番ですよ!!』

万が一の場合にも備えて、ライスシャワーと祝福の声の波間から随分と離れて拍手してたにも関わらず。

『え?え?ええええ?!』

学生時代ソフトボールのピッチャーをやっていたと言う花嫁が投げた向日葵入りのブーケは、ピンポイントで私の掌の中にフワリと舞い降りたのだった。

「いや…アイツのブーケをあたしが受け取ってどうすんのよ」

恥ずかしさと情けなさで、今思い出すだけでも消えてしまいたいくらいだった。

ため息混じりでコクツとグラスを煽る。ライムの果汁にほんの少し丸められたボンベイ・サファイアの熱が少しだけ胸底を熱くした。

『…皮肉もいい所よね。まったく』

今も引き出物を詰め合せた袋の中から覗く向日葵は、私を嘲笑う様でもあり慰める様でもあった。アイツは…どう思ったのだろう。せめて顔色変えずにシレっとしてりゃ良いんだけど。

持ち前の人の良さで困った顔でもしてたらタダじゃおかしい所だ。

別に怒りは湧かないし、未だに一粒の涙は出ない。出続けてるのはため息だけだった。

それでいいやと思うことに、もう随分と慣れ過ぎてしまっているのかもしれない。

「野村さん、こんな所で何やってんすか。ビンゴ始まってますよ」

パーティの中心から抜け出してきた進藤君が駆けてきた。

この子も道ならぬ恋をしてるってのに随分とまあ元気な顔しちゃってさ。

「…ああ、ごめんごめん。さ、いこつか。まだ出てないわよね？高級スパリゾート宿泊券！」

「多分ね。あつちで番号控えてますから行きましようよ」

パーティの中心を指差す。はあ。随分と盛り上がってるけど、私にとっちゃ過酷な修行場みたいだよ。

「わかったわかった。年寄りを急かすなって。ちなみに全部ハズれた場合は進藤くんのおゴリで3次会カラオケね」

「ええ？どついう理屈ですか。それ」

心底驚いた、つてな顔をするバカ正直な後輩…この子、こんなんで略奪愛なんて成立させられるのかしら？

「代わりにコレあげるからさ」

フと思いついて、包みの中の向日葵を押し付ける。

「えっ？だってコレ野村さんが」

「ああ。あたしにや必要ないし」

呟いた後、本っ当に100%純正のバカ正直はあからさまに顔を曇らせた。

「まったく仕事のやり方だけじゃなくて、人の良さまで真似させたのかしらアイツは。」

「ぶつぶつー！あんたに同情される程落ちぶれてないわよーだ！」

「あたしはこういうのが苦手なだけ。花粉症だしさ。わかったら返事〜」

「……は、はあ」

「元氣ないなあもぅ。」

「その花。君が一番渡したい人に渡しなよね」

「……え？」

「彼女泣かせたら承知しないからね」

あえて名前は伏せた。言えは頑なに否定するだろうから。

私の言葉を戸惑いながら一瞬口ごもった後、けれど彼の中の炎は瞳に光を灯した。

「はい」

「…うん。そうこなくっちゃ」

ズルイかな？私は。

自分の幸せが選べないから。

目の前の後輩の結婚式を心から祝えないから。

すり替えのように、せめて誰かの幸せを願いたいと思う。

それは、独りよがりだろうか？

そうなのかも知れない。

でも、今は、今だけは私の弱さを忘れたかった。

「…あつ、野村さん。21番だつて！」

「え？やたっ！！ビンゴっ！！」

今日は結婚式。誰もが幸せな気分になれるはずのお祝いの日。
その笑顔の甘い時間の中。

少しだけ、涙の隠し味があることを、私だけが知っている。

（後書き）

相変わらず文章下手だなあといいながら、3話目投稿致します。
元々昔書いた実話を基にしてみましたので、そのままじゃまずいかな？と手入れをして投稿したのですが……。何だかモヤモヤして、書き直すのは卑怯かと思ったのですが、結局元の話に戻してしまいました。まあどっちにしろあまり中身はないけど（笑）またご意見頂けましたら幸いです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4075c/>

Bouquet

2010年11月18日03時27分発行